

浴衣の君は…左遷なので

第6回市民セミナー「榊原藩の転封」より

吉田拓郎に言わせれば、♪浴衣の君は～薄のかんざし♪となるのですが、姫路では「榊原政岑（さかきばらまさみね）」と固有名詞になります。

姫路の旧城下では毎年6月下旬に「ゆかた祭り」が行われます。建前は長壁神社の祭礼なのですが、呉服業界主催の「ミスゆかた」パレードや“西日本一”とも言われるほど多くの夜店が市中に出店することのほうに有名で、姫路周辺の町村からも多くの客を集める一大イベントとなっています。

市民には広く親しまれている祭りですが、その由緒となるとあまりはつきりしません。政岑が越後高田転封に際して、「城下の祭りを華やかにゆかたを着て送ってくれと言った」（播磨学研究所編『姫路城を彩る人たち』2000）ともいわれます。別にイベントなので詳しく調べる必要がないといえばそれまでなのですが、先日第6回市民セミナー「榊原藩の転封—播磨国姫路と越後国高田—」（講師：花岡公貴氏）で、榊原家文書の中からこの祭りについて講師の方に調べていただく機会がありました。

結論から言うと、当該文書には「ゆかた祭り」に関わるものはいまのところ見当たらないということでした。少なくとも「ゆかた祭り」については史料的な裏付けが、現段階では無いということになります。チョコレート会社によるバレンタインデーが想起されてしまいます。しかし、こうしたイベントが榊原政岑に付会されることには注意すべきでしょう。

さて、榊原政岑はどういう人物だったのか、上記セミナーの内容にそって概観してみましよう。榊原氏については言うまでもなく、“徳川四天王”の一人でした。譜代の中でも名門中の名門と言っても過言ではないでしょう。しかしそんな榊原氏も跡継ぎがなく、他家から養子をとる代がでてきます。政岑もそんな一人で、分家である旗本の二男でした。それが当時姫路藩主だった榊原政祐の養子となり、享保17（1732）年に藩主となるわけです。ですから本来ならば旗本の家も継げないような分際だったわけで、何の因果か本家を嗣いで大名になってしまうのです。大名になるべき身として成長してきた者と異なり、ある意味気楽な旗本次男坊ですから、大名たるべき人物としては違和感があったかもしれません。例えば、高尾太夫の落籍は、彼の個性を象徴する一つの出来事と言えるでしょう。

政岑は出府中、たびたび吉原に通い、そこで高尾太夫と馴染みになりました。彼女は政岑の乳母の娘という因縁浅からぬ間柄だったなどともいわれますが確かなことは不明です。その彼女を2,500とも3000両ともいう大金で身請けし、姫路に連れ帰ったのが寛保元（1741）年6月といます。巷間語られるところでは、この行状が將軍の不興を買ったとされています。ところが榊原家の史料では高尾を落籍したことを直接批判するような記録はありません。それよりも次の史料が注意されてよいでしょう。

（前略）市之橋御新宅之儀ニ御座候、東御屋敷さへ広過候御事ニ奉存候、然ルに御欲ニ任セ御奢御長過之御義以外之御義ニ奉存候、御勝手御富有ニ被成御座候節ニてさへ無用之御費被遊候義、御人君之上別て御不行跡之御事ニ御座候所、只今之御勝手一通り之御不勝手杯と申義とハ不奉承知、尤御家之御存亡ニも懸り候程と申御時節ニて、第一御譜代御相伝百有余年旧功之御家中之面々家内之餓を凌兼候勢ひ（中略）

況、女服之様成物被為召候と申義、御身を御汚し被遊候と申物ニて御座候、御偉人様之御心ニケ様之下品成御物数奇御趣向可有御座事共不奉存、畢竟、御年若之自分悪敷所江御遊行被遊、御身を被為汚候御癖御止不被遊候故と奉存候（中略）

其衣食住三つ之内ニハ御食料等之義ハ外へ顯れ不申事故御沙汰も広く無御座候哉、御普請と御衣服之義ハ表へ附候事明らかに御座候故、国中之取沙汰計ニも無御座候、姫路之儀ハ往還之街之義諸国へも早速相知申候、此度備前へ罷越候而も御沙汰相聞申候、備中其外へ參候而も同前ニ御座候、右之沙汰姫路ニて承り候と申沙汰も多くハ大坂ニて及承候様ニ相聞申候、左候得ハ江戸・上方などハ不及申、長崎辺、又ハ奥州之果迄も可有御座義と奉存候（下略）

これは「嗣封録」（榊原家文書）に載る大田原儀兵衛の諫状の一部です。衣・住の行き過ぎた贅沢やアブノーマルな趣味が御家の存亡にかかわるという諫言です。公式の系譜に家臣の諫状が載るくらいですから、家臣団の煩悶とその原因となった政岑のパフォーマンスの程が容易に想像できます。ちなみにこの史料には姫路城の屋敷に

関する情報が記されています。まず「市之橋御新宅」というのが、現在の好古園のある辺りにあった高尾の屋敷かもしれません。また「東御屋敷」が酒井時代のそれと同じものを指すとすれば、文脈からその創建が榊原時代の可能性もあります。

さて、政岑は寛保元年9月に出府を命じられます。26日に姫路を出発し、10月12日に江戸に到着しました。その翌日には早速親戚や家老が江戸城に召喚され、老中より政岑に「不行跡」のため隠居を申付け、家督は政永に相続させ、おつて所替がある旨申し渡されました。そして11月に高田への転封が決まり、翌年3月に姫路城の引渡しと高田城の受取りが完了し、政岑は5月に高田へ移って行きました。高田城下は姫路城下とそれほど差がない規模だったようですが、松平忠輝や松平光長といった大名の改易が強く印象にあるせいか、左遷のイメージがつきまとう場所柄だったようです。

寛保元年の急展開は政岑の「不行跡」が問題になっていますが、これは前述のように高尾との女性関係がとくに取沙汰されているわけではなく、大田原儀兵衛が諫言したように政岑の贅を尽くした奇抜な行為にあったといえるでしょう。この点に関しては、すでに橋本政次が『姫路城史』の中で『徳川実記』を引き「吉宗、政岑の奢を惡む」として、奇抜な格好で江戸城大手門番を務める政岑を將軍吉宗が無視した逸話をのせ、吉宗が政策として掲げている質素儉約を真っ向から否定する政岑を嫌悪したことを紹介しています。つまり、政岑が蟄居を強制させられたのは尾張藩主徳川宗春と同じように、享保改革に対する抵抗勢力と幕府に見做されたためというわけです。宗春の蟄居後も豪華な遊びをやめないところに、政岑の享保改革に強固な抵抗の意志を読み取る（中元孝迪『姫路城永遠の天守閣』2001など）とするなら、親藩および譜代の代表的な大名に対する強権発動には、改革遂行に向けた吉宗の強い意志を窺うことができます。

政岑の蟄居と榊原家の転封の背景はおおよそわかりました。では「ゆかた祭り」はどうなのでしょう。上記の政岑の蟄居・転封への経過からすると、姫路城下の人々が政岑のリクエストに応じてゆかた踊りで送り出した（播磨学研究所前掲）というのは再考の余地がありそうですし、「幕府のおとがめにも政岑はめげず、高尾と二人で江戸神田明神の祭りを再現し、浴衣踊りに見送られつつ姫路を去った」（『名城を歩く1 姫路城』2002）となると小説の世界となります。榊原家の高田転封は政岑の出府・蟄居後に決定しているのです。

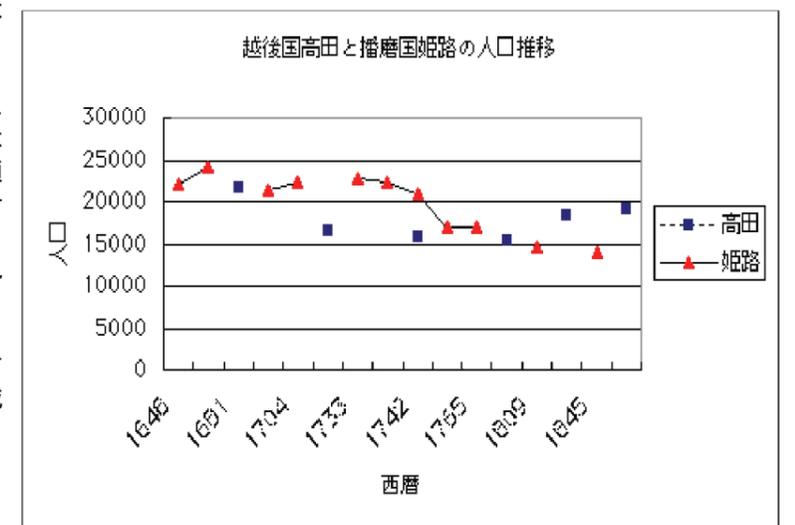
十月、姫路百姓・町人江戸・大坂へ罷出、殿様不時之御召二付、万一御所替も有之哉と相嘆き、町人ハ大年寄始申合、大坂町御奉行所江罷出、訴状差出候、承知被成候由二而罷帰、百姓者大庄や始申合最寄大坂江罷出候所はきはきと御挨拶も無之哉、直二江戸へ罷出、寺社奉行其外御役中へ同訴状差出候由

今回のセミナーで紹介された記録（「嗣封録」）ですが、それによると姫路では10月になって、9月の急な政岑への出府命令が、榊原家の所替に関わるものであることを察知していた様子がわかります。それに対して姫路の領民は榊原家の転封を阻止するため、姫路町大年寄は大坂町奉行に訴状を提出、百姓も大坂へ出張しています。しかし返事がないので、江戸まで出て寺社奉行などに訴状を提出したというのです。

そこまで領民が榊原家の転封を拒みたいのは、政岑に対する人気が背景にあったからということも一つの見方でしょう。派手なパフォーマーが地味な生活を押し付ける公儀を否定する存在として民衆には支持されやすいのは、現代にも通じるところがあります。また一方の解釈としては、今ここで転封されたら経済上困るという見方もあります。豪華な生活をしていた政岑は上客だし、一方で商人などに多額の借金があったかもしれません。転封によって借金が一方的に棒引きされては債権者は困ります。実際、榊原家の転封に伴い大勢の町人が姫路から高田へ移ったそうですから、可能性は否定できません。ただ、この二つの見方はどちらか一方だけということではなく、両方が合わさっていたと考えるほうがいまのところは妥当かもしれません。

あとは想像の域を出るものではありませんが、当代きっての遊女を身請けし、その彼女を姫路に連れてくるとなれば領民もかなり関心をもったはずで、姫路着城に際して一目見ようと大勢の領民が殺到し、それが祭りの起源、なんてことは考えられないのでしょうか。

いずれにせよ、「無用之御費」といい「女服之様成物」を着るような「下品成御物数奇御趣向」は、とくに姫路町人には経済的な強いインパクトを与えた可能性は十分に考えられることです。右表のように、榊原家転封後、姫路城下の人口が減ったままなのは何らかの因果関係があるようにも思えてきます。



"Shiro Fumi" No.54 The News of Himeji Center for Research into Castles and Fortifications.